



平成28年度環境研究総合推進費 研究成果発表会  
「環境研究の最前線」2016年10月19日@全日通霞が関ビル

## 能登半島における里山・里海の恵みのわかちあい

齊藤 修

国連大学サステナビリティ高等研究所



## 日本を代表する地域農村社会：里山・里海 Socio-Ecological Production Landscapes and Seascapes (SELPS)



- ✓ 里山：農地、ため池、二次林など様々な環境と、人々の営みがモザイク状に存在することで多様な**自然の恵み(生態系サービス)**をうみだし、人間の生活の豊かさに貢献
- ✓ 里海：近年では里山の概念が海にも拡張
- ✓ 里山・里海では、食料をあげたり貰ったりという相互扶助ネットワークが、地域の伝統や文化の維持にも密接に寄与  
→GDPのような経済指標では測定できない**生活の豊かさ**
- ✓ しかし一方で、その多くが少子高齢化や過疎化など様々な社会問題に直面



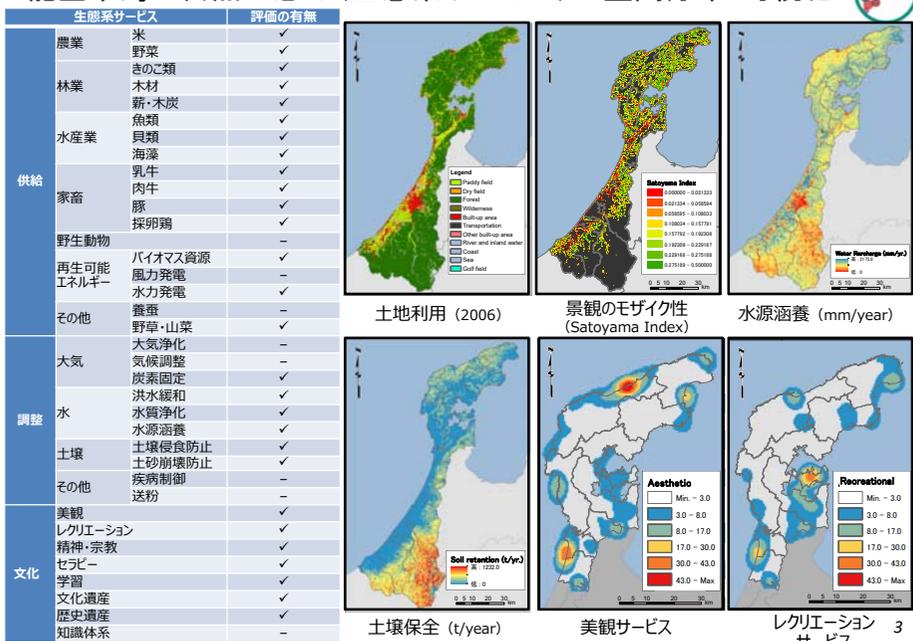
里山



里海



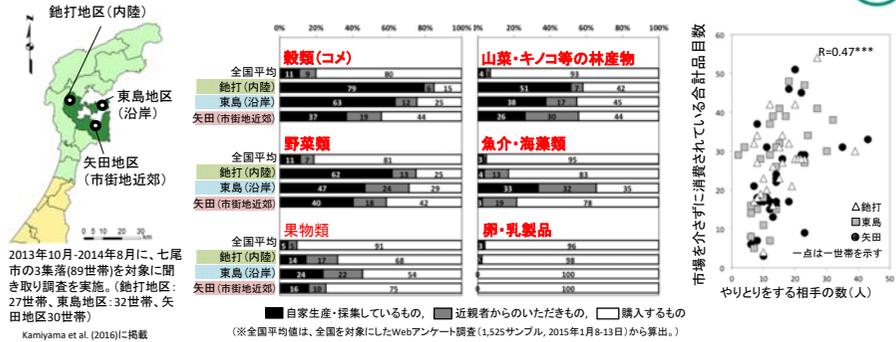
## 能登半島の自然の恵み(生態系サービス)の空間分布・可視化



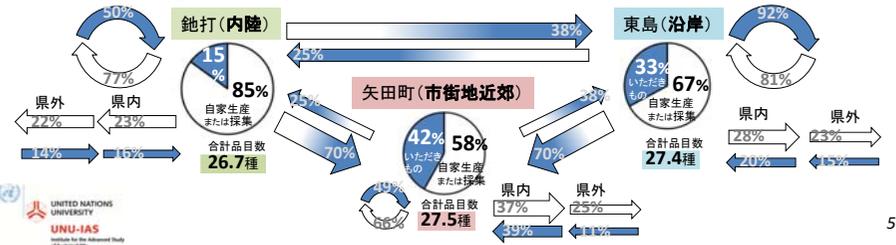
## 食事に占める自家消費の割合(2013年12月Web全国調査結果(N=1,036))



# 石川県七尾市の3集落89世帯における聞き取り調査結果



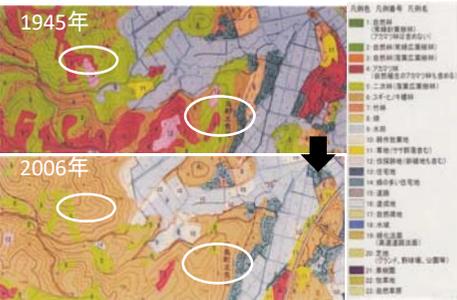
## <世帯あたりの市場を介さずに消費されている品目数の内訳と地域間での品目数ベースでのやりとり(平均)>



## 森林管理と山菜生産・採集量

七尾市鈍打地区の27世帯を対象に聞き取り調査を実施(2013年10月-11月)

- 昔に比べて発生量が減少
- 手入れ不足による山の荒廃
  - 猛暑、高温等の気候条件の変化
  - 植林地の拡大
  - 広葉樹、針葉樹が大木化、老齢化
- 採集活動量の減少
- 時間がない
  - 高齢化による体力の衰退
  - 発生量の減少
  - 加工処理が面倒
  - あける相手の減少



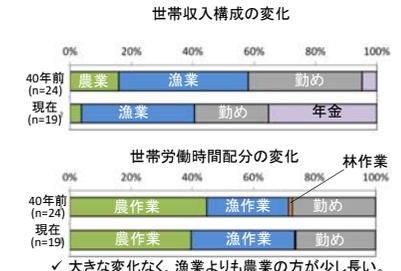
落葉広葉樹からなる二次林(緑)やアカマツ林(赤)が大幅に減少し、ほとんどがスギ・ヒノキ植林地(茶色)に変化し、景観が均一化していることが分かる。

出典: 黒木川流域植生調査(金沢大調べ)

## コメ生産・森林と海面漁獲量

七尾市(南大呑・北大呑、崎山)67世帯を対象に調査(2015年7月27日-8月1日)

項目	40年前	現在
農作業をする世帯数(田)	63世帯	62世帯
農作業をする世帯数(畑)	62世帯	43世帯
漁作業をする世帯数(海産物や趣味を含む)	24世帯	21世帯
林作業をする世帯数(枝打ち、下草刈り等含む)	26世帯	15世帯
複数の作業をする世帯数	45世帯	33世帯
世帯あたりの同居人数	6.0人	3.7人
世帯あたりの同居世代数	3.1世代	2.0世代



結果は農業と漁業の両方を営む世帯の値を集計。

## まとめ

- 能登半島の里山・里海には、全国的にみて極めて豊かな自然の恵みが分布し、自家生産と「おすそ分け」文化が健在。
- 各家庭にはやりとりをする相手が存在し、地区内外との食料を介したつながり(社会的ネットワーク)が自家消費に大きく貢献。一方で、今後の高齢化や少子化からネットワーク及び自家消費の減少・縮小のおそれ。
- 自家生産していない家庭でもいただきものがあり(最大20品目)、自家生産を行わなくなった家庭や高齢者にとって、ネットワークは食料を得る手段(セイフティネット)として機能
- 防災機能の強化、祭りなど文化・伝統の持続性の観点からは、集落間、また農村部と都市部のつながりも重要
- 山、里、海連関による自然共生圏の形成に向けては、モザイク景観の基盤となる複合的な生産(生業)と地域内・地域間交流、産業連携の強化が必要
- 今後の里山・里海の地域づくりを進めるには、食のわかち合いのサブシステムを集落内・集落間でより日常・非常時の機能の両側から能動的に捉えなおし、これを活性化していくための仕組み・支援が有効

→「食料自給力」の強化を通じた自然共生社会の実現へ

